

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 李 嘉

論 文 題 目

日常会話のコーパスにもとづく「いや」と「不是」の談話機能と韻律的特徴に関する日中語対照研究

(Contrastive Study of Japanese *iya* and Mandarin Chinese *bushi* on Discourse Functions and Prosodic Features Based on Corpora of Everyday Conversation)

論文審査担当者

主査 名古屋大学 准教授 加藤 高志

委員 名古屋大学 教授 杉浦 正利

委員 名古屋大学 教授 山下 淳子

論文審査の結果の要旨

1 本論文の構成と概要

本論文は、『名大会話コーパス』と、筆者が収集した、14時間の日本語の日常会話の録音データと7時間の中国語の日常会話の録音データを分析資料として、日本語の「いや」と中国語の「不是」の談話機能、および、談話機能と韻律的特徴の関係を明らかにすることを目的としている。そしてこの目的に対して以下の研究課題が設定されている。

課題 1-1 「いや」の発話内の分布特徴は何か。

課題 1-2 「不是」の発話内の分布特徴は何か。

課題 1-3 「いや」の発話内の分布特徴と「不是」の発話内の分布特徴にはどのような異同があるか。

課題 2-1 発話連鎖において、「いや」で始まる発話が出現する位置とその条件は何か。

課題 2-2 発話連鎖において、「不是」で始まる発話が出現する位置とその条件は何か。

課題 3-1 発話冒頭に現れる「いや」の談話機能は何か。

課題 3-2 発話冒頭に現れる「不是」の談話機能は何か。

課題 4-1 「いや」を談話機能ごとに見ると、それぞれの韻律的特徴は何か。

課題 4-2 「不是」を談話機能ごとに見ると、それぞれの韻律的特徴は何か。

本論文は9章から構成されている。第1章では、本研究の研究背景、研究目的、本稿の構成について説明され、上記の研究課題が示されている。第2章では、本研究の理論的背景、本研究が用いる重要な概念について説明したうえで、「いや」と「不是」の先行研究について述べられている。第3章では、研究方法が説明されている。とくに、『名大会話コーパス』と筆者が構築したコーパスである『C-ORAL-JPN』と『C-ORAL-CHN』について説明し、それらからのデータの抽出方法と分析手順が説明されている。

第4章から第6章では日本語の「いや」が扱われている。第4章では、『名大会話コーパス』における、「いや」の1発話中における分布特徴および、発話連鎖における冒頭に「いや」がある発話の位置、また、前文脈との関係について記述されている。その結果、日本語の「いや」は発話冒頭、発話中、発話末尾、独立用法の4つの位置で用いられるという分布特徴、および、発話冒頭の出現率が最も高いことが明らかにされている。

第5章では、発話連鎖内の位置、意味的特徴、発語行為の種類、会話参加者のスペースという4つの指標に基づいて、発話冒頭の「いや」の用法を外示的意味への否定、内示的意味への否定、感情・知識状態の変化の表示、ネガティブな事象への共感という4つの談話機能に分類している。

第6章では、『C-ORAL-JPN』のデータを用いて、第5章で示した4つの談話機能ごとに、「いや」の韻律的特徴が分析されている。その結果、ネガティブな事象への共感の「いや」の持続時間は長い傾向があることが明らかにされている。

第7章と第8章では「いや」と似た意味を持つ、中国語の「不是」が扱われている。第7章では、『C-ORAL-CHN』における「不是」の発話内の分布特徴、発話連鎖における「不是」で始まる発話の分布特徴、そして「不是」の談話機能が記述されている。「不是」の出現位置については、「いや」と同様、発話冒頭の出現率が最も高く、次は発話中、独立用法、発話末尾の順となり、「いや」の分布と一致することが明らかにされている。そして、「不是」を含む発話連鎖内の位置については、連鎖の第

論文審査の結果の要旨

1 ペア部分と第2ペア部分に「不是」を含む発話が多く見られることが明らかにされている。そして、「いや」に対して用いた4つの指標と同じ指標に基づいて、発話冒頭の「不是」の用法を外示的意味への否定、内示的意味への否定、感情・知識状態の変化の表示、その他の修辭的な用法という4つの談話機能に分類している。

第8章では、第7章で示した談話機能ごとに、「不是」の韻律的特徴が分析されている。その結果、「不是」の各機能の「否定」性の強さによって、異なる韻律的特徴が4点明らかにされている。1点目は、最も「否定」性が強い外示的意味への否定は、焦点を当てる必要があるため、強勢を置いて発音されることが多いことである。2点目は、内示的意味への否定を表す「不是」は外示的意味への否定を表す「不是」より短く発音され、búshì もしくは búsh に弱化するが、[pu:] と [pu] ほどの弱化現象は見られないことである。3点目は、会話の円滑な進行を促進する、修復、話題転換のために用いる感情・知識状態の変化を表示する「不是」は、「否定」性が弱いため、母音の弱化や持続時間の短縮が起きるとのことである。4点目は、「不」と「是」の組み合わせとして用いられる修辭的な「不是」が置かれる反語文は、相手の同意を促す行為を実行するために用いる会話のストラテジーであり、感情・知識状態の変化を表示する「不是」と同様、持続時間の短縮および母音の弱化のような顕著な韻律的な変化が生じる場合があることである。

第9章では、論文のまとめと研究課題の答えが示されている。そして日本語の「いや」と中国語の「不是」の対照が行われ、本研究の意義と今後の課題について述べられている。

2 本論文の評価

本論文は、博士論文として以下の点が評価される。

- (1) 先行研究においては、「いや」と「不是」の談話機能の分類は部分的、断片的にしか行われていなかったが、本論文は4つの指標にもとづいて体系的な分類を示した。
- (2) 中国語においては、録音データが利用でき、かつ、話者の社会言語学的な背景が分かるメタデータが得られる日常会話のデータを入手することが困難だったため、自ら日常会話を録音、収集し、文字化を行ったうえで、「不是」の談話機能と韻律的特徴の分析を行った。
- (3) 日本語の「いや」と中国語の「不是」の談話機能の共通点と相違点を明らかにした。

一方で、審査委員から将来に向けて次のような課題が指摘された。

- (1) 韻律的特徴の分析において用いたピッチ曲線の表示が、おそらく音声の音質が不十分であることが原因で、部分的に切れてしまっている例がある。より音質の高いデータを用いることが望まれる。
- (2) 日本語の「いや」の談話機能の分類は、筆者が行った後に日本語の母語話者6名による検証が行われているのに対して、中国語の「不是」の談話機能の分類は、母語話者である筆者1名によるものであり、複数の母語話者による検証が行われていない。
- (3) 「いや」、「不是」はどのような表現と共に共起するかが記述されているが、さらにその理由を考察してほしい。

論文審査の結果の要旨

しかし、これらは今後研究をいっそう発展させるための課題であり、本論文は博士論文として十分に評価できるものである。

3 結論

以上の評価により、学位審査委員会は本論文が博士(学術)の学位に値するものであると判断する。